



GARDEN LIFE.

土地に馴染む庭

自然の営みに心を寄せ、畏敬の念をもって
植物と向き合う。

自然の理には、決して逆らわない。

そんな庭づくりで、業界をけん引するのが
造園家の菊池秀幸さんです。

北アルプスと田園風景を一望するこの庭も、
菊池さんが手掛けました。

しかし、西の庭には木が一本もありません。

あえて植えないその理由にも、

菊池さんらしい哲学が感じられました。





28LABO
LANDSCAPE ARCHITECTURE

代表 菊池 秀幸氏
HIDEYUKI KIKUCHI

栃木県宇都宮市出身。ウィンタースポーツへの傾倒を機に信州の自然に魅せられて移住。「好きなことを仕事に」と未経験で造園業界へ。造園業者で修業を積み、2018年に独立して28LABOを立ち上げ、自然な造形の庭づくりに注力。1級造園施工管理技士、2級土木施工管理技士、自然再生士、1級エクステリアプランナー。



家を中心に、芝生の庭と向かい合う雑木の庭。軸となるのは、高木のアカマツやアカシデ。自然界の法則にのっとり、その他の高木・中木・低木を、あるべき場所に配置した。



が思い浮かんだんです」。この『里山』とはH邸の庭。山々の延長にある場所ととらえ、東側の庭には安曇野の自然界に自生する樹種を選びました。例えば、真つすぐに伸びた1本のアカマツ。その佇まいは、あくまで『山の松』です。「山に入れば分かりますが、これが本来のかたち。太くて曲がった

この家の三角屋根が、北アルプスとシンクロするようにも感じた菊池さん。「三角屋根の家を山に見立てると、北アルプスの麓に小さな山、その裾野には木々が生い茂る里山というイメージ

横浜から移住してきたHさんご夫妻。「ここは分譲地ではなく、昔ながらの家々が残る土地。その景観を損なうことなく、馴染むような庭にしたかったんです」。菊池さんも思いは同じで、北アルプスの山々が連なる圧巻の眺めを前に、『安曇野の原風景』をモチーフにした庭の姿を思い描きました。

山と三角屋根を借景に
安曇野の自然を描く庭

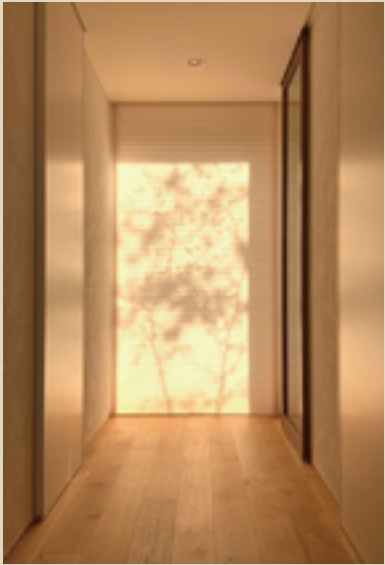


春から庭に出るようになって、季節の移ろいを肌で感じているご夫妻。「花が咲いたり、新芽が出たり。それを発見するのが、もう嬉しくて！秋には、紅葉した木々が見られるでしょうね。今から待ちどしいです」

松を良しとするのは、人間の価値観です」と菊池さん。山にアカマツがあれば、それをそのまま庭に再現する。「自然の縮図」といわれる古典的な庭づくりを、シンプルに実践しました。岩盤から採掘したこのアカマツは、貧栄養の場所に植えられています。自然界に近い環境をつくり、木が大きくなるスピードを遅らせるためです。意外なこと、一松にとってこの環境は不快じゃないんですよ。元々、過酷な

場所で育つ木ですからね」と菊池さん。植物が本来好み、自生する環境を整える『植物本意』の庭づくりは、菊池さんの真骨頂。手間を惜しまず、植物にとっても心地良い庭を追求しています。待ち望んだ芽吹きの中。「庭に出るようになったら、ご近所さんが声を掛けてくれるようになったんですよ」と、ご夫妻が声を弾ませます。周囲の自然に溶け込むこの庭が、新天地の暮らしを賑やかに彩ってくれそうです。





ご夫妻のお気に入りには、目隠しに植えたソヨゴが映える東向きの窓。「朝日を浴びると、スクリーン越しの木が影絵みたいに見えるんですよ。毎朝、リビングから眺めを楽しんでいます」

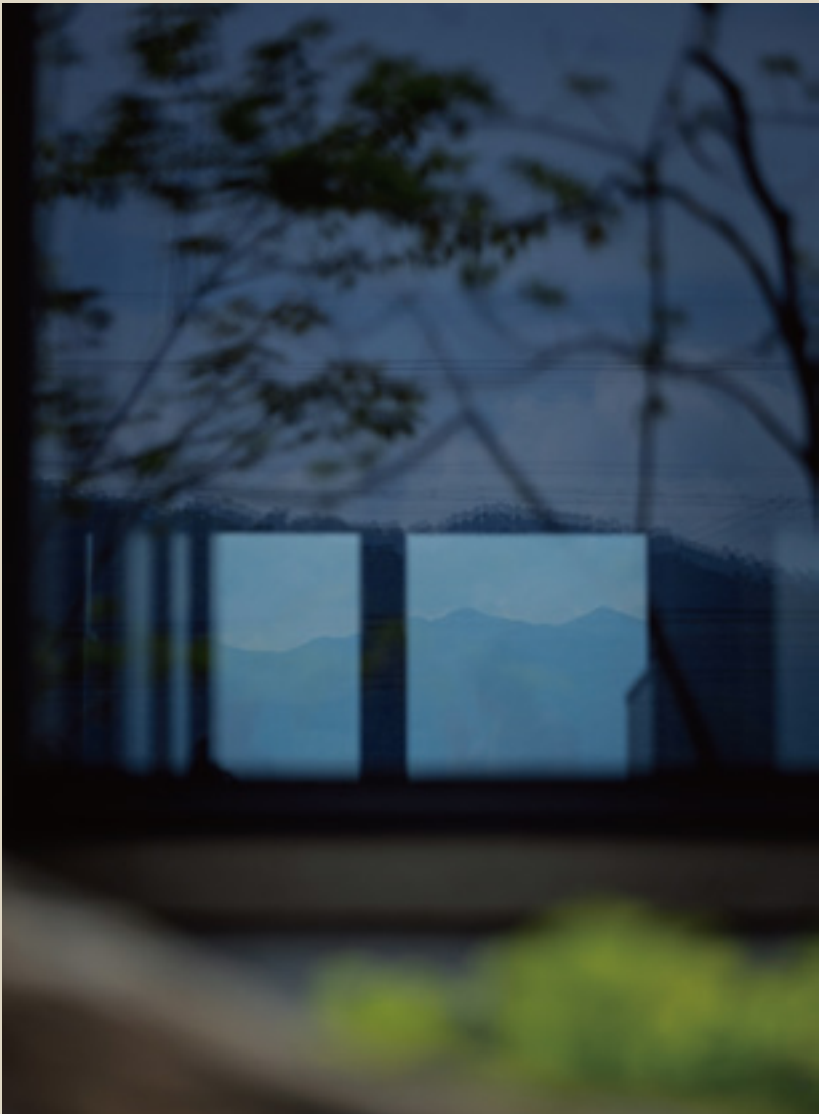
土地に合う樹種を選ぶ。樹種が決まれば、おのずと植える場所も決まると話します。唯一の例外は、アプローチに覆い被さるようなアーチ状のモミジ。「高木の下ではないけれど、強い西日は受けない立地。朝日だけなら大丈夫だと判断しました」

庭は家と違い、刻々と移り変わるもの。完成した時から、一生が始まります。だからこそ「10年後、20年後、30年後を見越して庭をつくります。木はほとんど生長しますからね」。毎年の剪定は答え合わせ。切り方一つで木の姿が変わる様は、まるで壮大な実験のようです。「木は生き物。基本的な性質は同じでも、やっぱり個性差があるんですよ」。その見極めに、菊池さんならではの手腕が発揮されます。

自然界では、高木・中木・低木が折り重なるように階層構造をなしています。この「本来の自然」を再現したのが、東側にある雑木の庭です。アカマツやアカシデ、コナラといった高木がところどころの木陰の下に、モミジやアオダモなどの中木。さらにその下には、直射日光を嫌うツツジやソヨゴといった低木を植えました。好きな木を好きな場所に植えるというのは実はナンセンスで、菊池さんは「木の選定や配置に、人間のエゴが介入する余地はない」と、キッパリ。植物が元気に育つためには、

自然界では、高木・中木・低木が折り重なるように階層構造をなしています。この「本来の自然」を再現したのが、東側にある雑木の庭です。アカマツやアカシデ、コナラといった高木がところどころの木陰の下に、モミジやアオダモなどの中木。さらにその下には、直射日光を嫌うツツジやソヨゴといった低木を植えました。好きな木を好きな場所に植えるというのは実はナンセンスで、菊池さんは「木の選定や配置に、人間のエゴが介入する余地はない」と、キッパリ。植物が元気に育つためには、

自然の法則に逆らわず
ありのままを表現する





アルプスの山々と、山を連想させる三角屋根の家、庭の雑木が連なり、違和感なくひと続きの風景となるように意図したデザイン。落葉の季節には、空に向かって真っすぐ屹立するアカマツが、圧倒的な存在感を放つ。

「日本の住宅庭園」という
枠組みを超え、その先へ

近年、ホテルの作庭プロジェクトにも携わるようになり、菊池さんの庭づくりは新しいフェーズへ。住宅の庭とは根本的に異なる庭づくりに触れ、庭というものをとらえる視野が大きく広がったといいます。「ホテルのようなビッグビジネスしかやらないってことじゃないんです。今までにない経験から知見を得て、それを住まいの庭にフィードバックできたら、と」

日本の庭づくりを学ぶため、「28 LABO」の門を叩く外国人も増えました。多様な感性に触れるうちに、海外の庭をまるで理解していないと気付いた菊池さん。「日本らしい庭が一番だと思っていましたが、他を知らないんじや説得力ないですよ。海外の庭も実際に見て、どう感じるか。僕自身も分かりませんが、きっと何かが変わるはずです」。信じてきた価値観を一度手放し、庭づくりをゼロから見つめ直す。菊池さんは立ち止まることなく、歩み続けます。



「私有地の目印に」と、ご夫妻がオーダーした石積みのお堀。その手前には、菊池さんが採掘場で一目惚れしたという、ベンチのような巨石を嵌め込んだ。石を据える向きにもこだわり、内から外へと開く場所に。